芭蕉翁反古文

上

へ 5
2494
1

伊5
2.494
巻 1

芭蕉漁花屋實記序

今ハ一世ノ此花舎某ノ後廳ハ芭蕉翁終焉の地形の時ヲつくるあるまハ水ノ流れ穴と文ノ星ヲ使ヲ為ル社ハ石ハ沉ミ人ハ名ノ元亨釋書曰人ハ境留境者也ト誠なるかな此言漁川ノ史録ヲ補正成ノ戦死を国ノ為ニ盡シ涙を流さ族ハ忠義ヲ為ル人形ノ花屋の後廳芭蕉翁ノ終焉ノ實ノ記ヲ為ル清ス家潤ヲ拭ヲ葉ハ世ヲ月花ヲ為ル人ナ案カ拭ノ跡ヲ此ノ日記ノ為ル傳ヲ為ル風雅の冥合

明治四拾年三月文部省寄贈

やいとも是をくるに去来先生は萬寿こゝに翁生
涯の事実を書記し給ふ事そこうく
舊き事ハ忘れてそこへ浪速潟みしゝ芦
は草枕松島帖写須賀明石身ハ風雨に任せ行方さ
だめず漂泊二十年は暁は夢まくらに成り給ひし
面影はそこもとゝ千峯は後こゝへも枯さ迷
今風に花雪月をかこつも翁を慕ふ人共此不
可思議なる三生値遇は因と縁とを感仰まへ

文化七秋八月吾

東肥乞隱文曉識

翁反故上　花屋日記

肥後八代、僧文曉著

浪速　花屋菴奇測校

九月廿五日泥足の案内にて清水浮漬の藁居
に移し行事藁居の主の需に経尺杯半く折與
けまゝ泥足こゝろよ形ゝとけるまゝ殺勿とも
所思

此道やゆく人なしに秋の暮　翁

埃は面の木かゝ蔦　泥足

松風の秋をもよく
ものこゝろ　翁

毎年九月廿五日
漬物の事にて
松風の式なり
花屋菴にて執
行ふ

付一句の俳諧
芭蕉油を思ふ
うり

き所十人多經日數年の紀一抄ありて止む今歴八
ちはひ多西國へと思ひ立ちしかど何とも
なりがたく世はうかりけるかりひつゝあるこゝ
ちにやあらんと思ひうるに惟然は越えて
しかりけれ

旅懐

此秋も行くとしかぞ雪を慰 翁

遠方さすらふ身に奇行多き人間世
代化よりして其物思念ふかく自矣せし人

の如しこれよりあれば文字古今未曾有なり

惟然記

世に名園女亭と山海の珍味とをかく餐ぶる婦人
なるに禮をもつて敬ひ法をもつて貞潔閑雅の婦
人多実に珍奇松坂の人にて風雅に何来る学ひ
きりとり筆をもつて岡西惟中に伝おくり浪華の
のちに対惟中妻となる生時より風雅の名伝
をくゝ高し惟中の死後江戸にくらす其角と
門人となる

白象の月よりあれば足は塵也 翁

五葉をあつめて流を汲む新月　園女

き宗九人寄伝の句別記

惟然記

世の中の芝栢摩の一集をくき約束なりしの数日
打続き重食し給し中ごろ常ならぬ出席色
黄白ばかりなる

林ふかき蘭ハ寒くもる人を　翁

此夜より腹痛甚時々泄瀉四五日なり
弟常竹酒をすゝめ茶店に買参湯を飲し
きもひをとる験なく明日二日と押移る潔

翁五十五　四

仁度数度くるかゝ侍然ハすゝけり惟然支考
内議していろる良醫なりも招さいけんとゆけ
師曰我本元虚弱なるゆえ此ゆ薬
方いろいろ我性ハ本節なくてもるゆえ弟子
本節をもるゆくゆえ去来も一回よりゆる
諸をへさてもあんをハ早く消息をおくるへしと
夫より西人消息をもらゆ京大津へとはしける
ちうよう之道の尊い狭くゆる外る用所もなく多
人数入こみゆ保養介抱もるもくくく其所
此所とおもらるるとわれもる人あるゆ市堂翁奥

太良所若盛仁左衛門殿の書付受取り
間取敢のうく厚く致牧奇よ斉藤方法事
猶よく伺ひ其夜さくよ御介抱さくしあ為
移りさくしひり此時十月二日

次良兵衛紙

四日車庸畦止訓升舎羅何中某八師の病
氣とくに付之道真よりくしよ労つくさくしを
之道より同伴り為る中為る

嵐の原を離りて
月くに以下変し
めり

病氣ふ　よつ半同尋ね人さくも傷つくさくに
よる留変よ紙を出て且仁左衛門より申

扣帳　年寄八用示清左覺兼
年寄分し通真品を見

戌十月四日

次良兵衛記

次良兵衛

一　机一脚
一　硯一面　墨一挺　水入　小刀
一　烟草盆二口　火入　灰吹　長火箸
一　帚　二本
一　夜具五流　寺真　絹　四真　本綿
一　枕　五ツ
一　膳十人前　椀　粘口　四湯
一　竈　三口
一　釜鍋　一口　三口
一　火箸　三
一　茶瓶掛　二口
一　火鉢　二口　火箸　灰　真鍮
一　茶碗　十
一　茶碗鉢　三口

一薄刃庖丁　三本　一茶罐　一口
一藥湯　二ツ　一研木　一本
一摺鉢　一口　一炭斗　一ツ
一水嚢　一ツ　一油徳利　一ツ
一鹽　二口　一手水鹽　二口
一行燈　二張　一縣行燈　二張
一挑灯　二張大小

右

一四日　白米一斗　一味噌　三升
一　醬油一升　一薪　拾束

前五百上

一　炭一俵
一　紙一束
一　塩一升

右

一　油一升
一　雜紙一束

一ヶ月　座敷料　三歩二朱　相渡

右　仁左衛門ヶ方ニ而書ニ置

元祐後ヶ年老陽二世ヶ敷ヶ様ニ
寒暑ヶ年ヶ起居不穏ヶ之通ヶ稽古
ヶ敷ヶ不自由ヶ年ヶ計ヶ日ヶ堂永南ヶ

所若金仁者つ素者安寿無常極まれる無
備文之道諸制を先寓居を定り文今野
別の門寺の文山元の極殿老僧中者
乃至早く本節の極殿皆老の事
所の乗則本節と別番者の法依是本
貴雅之義早く清下り相待て本節之間仕
精存の法の思うべし不一

十月二日　惟然

支考

末板

殊に別番なる本節に仕相者の法
今朝依相者て式を者の老師の事所板の
泄禅之寓味を俄に一三夜夜中二十餘度
通宇是に法板園女亭を菌に過会
故る相者に一板に弁に業を迎す如く今
朝に至殊又通之制度数三十余度就始
之道を極と極に法板を沼支本節
同律の意を清下り相待て南久方の所若金
仁者つ所寿早く入て茶に意に

十月二日夜子ノ時　惟然

寺東板

行く大はしく瓦をみ仏ぞ尊くかの中堂
一文初く赤部まるよとの家の板の新やれ仏かへ
く常楽寺へ参く幸羅浮寺く寺の仏殿
越ぬと明快教者とこれ為に貴角と
幸原もかくら師者てくん

三日廿七行但屋根くて寺見る板まるとまきき
所二日朝く板之ひ屋く其夜ひ寺に行之仏見る

出ハ巳の時ありしと夫より紅ゆ打宗八軒ゆ
八夜の時ありしと寺く病床ゆ寄りたりしゆ師も
姑くゆ寄ゆ世話ゆ赤ハ八りのものゆまくさくしゆ法
國に用く人こハ者と訳のくく思ひ給ゆよ者老
わまくゆわさくゆよ本もゆはまハ子ゆくくおりゆくゆ
付文汝ハ骨肉とゆくしゆりひあまハ二日ゆさゆハ千
日ゆ知りひゆりゆくゆ今度かる土を境ゆく雑海の
菜薪ゆ憂ゆ羅惟ゆ再会ゆくゆくゆりひ居ゆ
に童ゆ年ゆ姑くくくゆ枝をしゆりたゆ人ハ
去ゆもゆくゆ於明世ゆ暫くくゆ僕世稽ゆ

いたりなはまたさせる実意もつくさゞるにかゝはらず忍
意の深き事を篤く年生をへて居るに忘却不仕と
数刻の間にむせ候何様賣薬の効験なりとも申
まじく候まゝ文消息をとゞめ候へば飛脚便に木節
につかはし候

支考記

同じく杖子の時迄つゞきて木節来る二日出の
商人の消息にも杖子也故大津を丑の時に立
一番舟に乗りて縋白由忌と是非諸子に云歎も
さるべくよしあしもつきて後横辯を伺ひ仁脈を診せ主

方逆逸湯を調合し

支考記

同じ朝木節申さるゝは朝鮮人参半両道修
町に伏見屋より同じく包ゐ十五代ほどに取よせて道
方よりも世話にまかせ洗濯老女とやらん師の江戸衣
外に衣類をよく園女よりは菓子并水仙を
送る支考は唯然と抱にて其諸津に見舞之道
ゆるやかにしはまかせ舎羅呑舟などの申す接摩なども
して今日三十度ばかりに及べく重き後重
あるべし

五日朝丈草乙州正秀ら俳ら氣色ら客客
志し時雨の四ら師世〳〵思ひの氣ひの朝路
ら清ら清ら清ら蛍ら枝菊蒲団又〳〵五流
茶ら汁醤油二升塩ら升味噌二升薪二
十束炭二十斗用新米三束ら今日師食した
ら〳〵湯素麺二箸ら枝中ら五十度
ひおら

次良清記

六日ら氣法晴ら〳〵朝の食入粥三箸茶枝

終宵寐入ら〳〵暫く睡眠したら山月ら
ら玄来ら〳〵めら〳〵先ら〳〵野の方ら踏し
亟ら〳〵大井川ら吟行せし句

大堰川波ら〳〵ら〳〵ら〳〵の月 翁

此句あら〳〵ら〳〵ら〳〵大井川社裏ら〳〵
から〳〵ら〳〵ら〳〵ひら〳〵ら〳〵清瀧ら〳〵

清瀧や波ら〳〵ら〳〵ら〳〵青松葉 翁

ら〳〵ら〳〵事柄ら変ら〳〵ら〳〵同巣ら〳〵ら〳〵人の〳〵
ら〳〵ら〳〵ら〳〵大井川の白い捨ら〳〵ら〳〵汝ら中ら〳〵
ら〳〵ら〳〵須臾園女ら拾ら〳〵

白菜は見るたてる足塵埃

吟吟しきり是又同業の似あるの句は道筋なり

さて扨おれ二句と一句に接をつけるあり白菊の句を

しおさせんとおりつくし汝うきいうん玄朱泥とうと

名匠はくく名作情を道を重ねたる有るべきの終

句一章はさきあり千辛万苦しきしと病脳の

中は清骨折風雅は深情しきしを眼ある

りのの若の此句を同業同巣とうとき恐るべし此

句を同業同巣のしきものの眼人きものの

其のあい此句に条情別に作るあり句意を

時に三句ともに別なりかるるあるる我いかれに

を見るるあり句は姿をなし青苔日厚く自無

塵きまいあるを隠者は高儀をかくる語今八園

女のいきいあくしあり陌上桑は調あるをかくるを

詠る吟あり意も妙あり語も妙あり世人は句

をるるの園の清節をもん酒を屋の語を

左太仲の必非絲與竹山水有清音とのべる絶

唱もおりまき園の二丈はとる貞潔は六朴

清艶は弦意と二句は留われるつあり感しても

なりあるとも必ず師も携婦まきおくれり

方逆逸湯を加減して入新を好ましめ園女を尺
舞しく菓子等贈さ侍次郎庵取計ひ立
道に贈る鬼貫玄来慈弟しきり還し園
女河中渭川玄来支考舎那と終日業と
なし孫日吳る和ようあり晴る夜に入あり人者
も来つるりけさい灯けりて人々伽しきあるりけき
八乙別正秀ホ去来支中ゆ六今茂師り泉下
はもとりもセしまとそ世はれ風雅いるなり行れん

玄来黙しきあ居ましるあもこと来ゆるかるし
ゆ名二日は消息面し扱ましるさ糸りもるとと人て
もさこのしるるるしゆはあ六今枝閑静なり只人今は
雅よおりしまさ八は後おやつるり減ほは伝遺を
ゆひしるるまつんるるあ静しる枕上に何ひるるあ機
嫌とるるるし四中はは翁次郎清に来るゆ去
さるる見つるさたるるひあのるるく伝遺は変化さ六
中るるしまるるるも真行草は三ッとるあるるしるるッ
ゆるるく千変萬化す象ひるるるは雲とあるるし八
汝ホ共心は様るるく地をるれて来ゆるる地六心也

杜子美の老とおりひさひい西上人の道心をしたひ
調て業平の高儀をうつしつまくも我が世をあり
とおりひかりあく他の化せうこと事うるを言こと事
いつまくも見〔　〕ロうるのたと喘きうをひけまへ春
舟清ロを洞を又薬をうるのせうあつまりたまと上
各葉をうるあ常をと書く

惟然記

八日天氣晴清不食うり京ハ〔　〕士なる信徳
ちを酒見あく清所病弟を同之同近江に角之ると
使来侍人へ揚ハ此間ハ今度ハ清西宮平復を

祈至ちんとあ住吉大明神と連中ちを人を立
へしと去年おくまきけ各おうくをと通路餞
を侍八電満とあ社務林采女方と祝詞をたつく
夏よく祈納ハ所おくを侍各詠

奉納

落つきやうくを水とあ神あつ光　木節
初雪よやうあるひうむ佐をハ宮　正秀
時うを鶏ハさうや法きうし　文草
起とを〻聲耳もうまて湯婆ハ　支考
あ仏や使とつまく来ちるき　春舟

居ながらにいきみつよき麝香の伽香
うかがふに竹はけやしやそさい 惟然
神はなほこのこらしやや松はけ風 之道
日よりあるべきに顔より霜の菊 乙州
よろしけそうるはやかるはけあるを 去来
大勢は集會のうはまたうしろ奥にて師を慰め
申はなを本節を集るよりはけ今朝は脉を何とか中
に沒骨に氣力も衰弱はあるべき脉絃ようし
最初は食滯より起り泄瀉あるも根元脾腎
は虛るべき大害は痢疾より起り逆逸陽毒

より移又加減しあるべ心を畫はいかゝ樂かやう
うと願ふべく治法を他醫よりもかんとおりよ去来
師はよりて師曰本節の中条をあるもいとおろ仙方
いうく虎口龍鱗を醫はるべと大業いうんをん我
かく悟道し侍まへ我呼吸はあるんなるいつくも
本節の神をを服せむ他ゑ服るるしとのうもし
はかの風流道德人これ同然をうなし
文考乙州等去来よりはうきやはけまへ去来
あ病床は撰姫をうしてもうあ古来を
鳴名は宗師多く大朝は鍾毋さへうは名匠

代辞世いまだ世につたへるものもいるべしあるべき
一句を残し給へる諸門人代望ましめ給へ師匠の
遺句いかなる代辞世今日代黄句いかなる代辞
世我生涯を捨て句一句として辞世なるべ
かし若我辞世いかなると問人あらば此年頃
捨おきし句いつまでも辞世なるべしたとへば
諸法従来常示寂滅相あるべし是釋尊代辞
世なるべし一代代仏教此二句なる外ハなし古池や
蛙とびこむ水の音此句ハ我一風を興せしを初て
辞世なり其後百千代句を吐ども此言なるべし

ちなみに人々辞世なるべ
と次第を清ら侍りを問ひ給ひ
ひ語なるべ此語密なる玄微妙翁代人々
らざるをもるべし

文考記

行くの春湖水野の杉有りを榜を贈ると
清息を今日はく伊賀と音信を玄来し為
中陰し然と乾坤を為るべきしかるに
師代を我信通代分と愚弱なる分の数百
里の飛杖ゆり心を訪旅なるとあはきを仏法

せ[illegible]い我過ぎ[illegible]人今大病[illegible]おこりて一類中[illegible]さ
[illegible]に対[illegible]宮[illegible]冥[illegible]も恐[illegible]たましひ今度
大切[illegible]おこ[illegible]も沙汰あ[illegible]ものこひける師[illegible]
[illegible]涙[illegible]あ[illegible]感じ[illegible]度数六十度[illegible]

惟然記

九日諸子[illegible]取[illegible]ひ[illegible]多ふ[illegible]衣裳又松[illegible]
[illegible]れ垢つき[illegible]不浄あ[illegible]と[illegible]ふ[illegible]衣[illegible]
[illegible]人[illegible]中師曰我[illegible]地波濤[illegible]草[illegible]
[illegible]塊と[illegible]多[illegible]絲[illegible]身[illegible]美[illegible]
[illegible]も未来[illegible]友[illegible]

[illegible]く鬼[illegible]ひ[illegible]と[illegible]生[illegible]本望[illegible]丈草士乗
と[illegible]夜[illegible]不汁[illegible]多[illegible]舟に
[illegible]せ[illegible]り[illegible]

[illegible]病[illegible]美[illegible]枯野[illegible]

枯[illegible]とめ[illegible]美[illegible]

[illegible]辞[illegible]辞[illegible]病中
[illegible]生[illegible]一大事[illegible]
[illegible]生涯[illegible]一風流[illegible]
[illegible]も妄執[illegible]一[illegible]今[illegible]
[illegible]日[illegible]朝雲暮雨[illegible]山水

鶴鳥はいとゝもとゝまりて心身風雅なる
さゝやかなる河魚は患よつゝを行ひなるゝ今
とはるゝまに其風神は名章を唱へ行の年
詩門業はゝゝ他門は同え未代は龜鑑なり
世渡とゝ家風を流し眼あるものゝ見をとゝ魂は
花さし再びうるものゝ見をゝゝは毛髮ゝなる
動ゝし列坐は面ゝ感慨悲想ゝ面惻絶し
面聲音を師匠一代遺教経なり此日ゝを
財文を地行人ゝ足度数ゝ行に

吉末記

十日 初時四ゝを師匠は度数ゝを
ひゝゝゝ脳ゝゝゝ人ゝを打ゝゝゝ流ゝ行面ゝ
ゝゝゝゝゝゝ本節此日芍藥湯なる諸ゝ
打ゝゝ食事をすゝめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
梨宴をはゝゝゝゝ本節かゝく制ゝはゝを頻を
に望ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ一行
味ゝゝゝゝゝ本節ゝ脳習うるゝ以
期ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝゝゝゝ今日ゝ人ゝ食ゝるゝゝ

椎熊記

十百朝きく時雨に野もひろ葉かく東武に其
角さら伝ふ東武に雄飛同伴ふ系宮に
序和為紀州を打くら泉路を伝ふ春を打入り
しらけくしくも師に学ぶをおくらと学つ歩を
とたつまくの渝たるつけそり来る庭苔を主
みくの清貧連をしらひら辞を見まわせて且
慈ひ且ふくふ師もはやたるひくるくいくる
唯く洞くみくふ其角も白髪くさしうつまわ
ゆくしを丈草去来支考其外所改同り
拾さる病性に始終を拾う此秋庭ふ伽子

多おひ、ふ一年も拾う探居しるを実に上
くふを師愛にさるふ
拾くさかりかく次に儒を望ふ人く
すくわくしく中ふ拾くめさかり朝日を
と茶に食事好り出縄に弱をたくと去茶拾う
つくふ中いくさ
病中に行をすふ多ふり　去来
去来曰超句を他より作ふくを口をきみ
多沙を厨あふ色ん涼く案くわや頓
日白俗をふ惟無い前秋正秀と二人く一ツ

初しくれといふより
四行目此雪の
うちこれへくしみへく
し

此蒲團と云つたへるは被なりしにかゝる人しきたまへる
へしものなり終夜森かりけれはそのよハ寒くと被
ぬきかけて正秀をはしめ笑ひけるとかや

ひつかふる蒲團や寒き夜やすこき　惟然

おもひよる夜伽もしたし冬籠　正秀

一坐是をきゝ皆いつれもともに笑ひけれは師も笑ひ
たまへり人々嬉しさかきりなく十日ニ来る其夜より有
けるに初しくれすりけれハ晴たる白雲さらに雪
ふるまゝ掩此地かく日南ニ群かゝりける人ゝ消まて
掩ひたまひし有まゝ下りけるを見給ひて暫く其

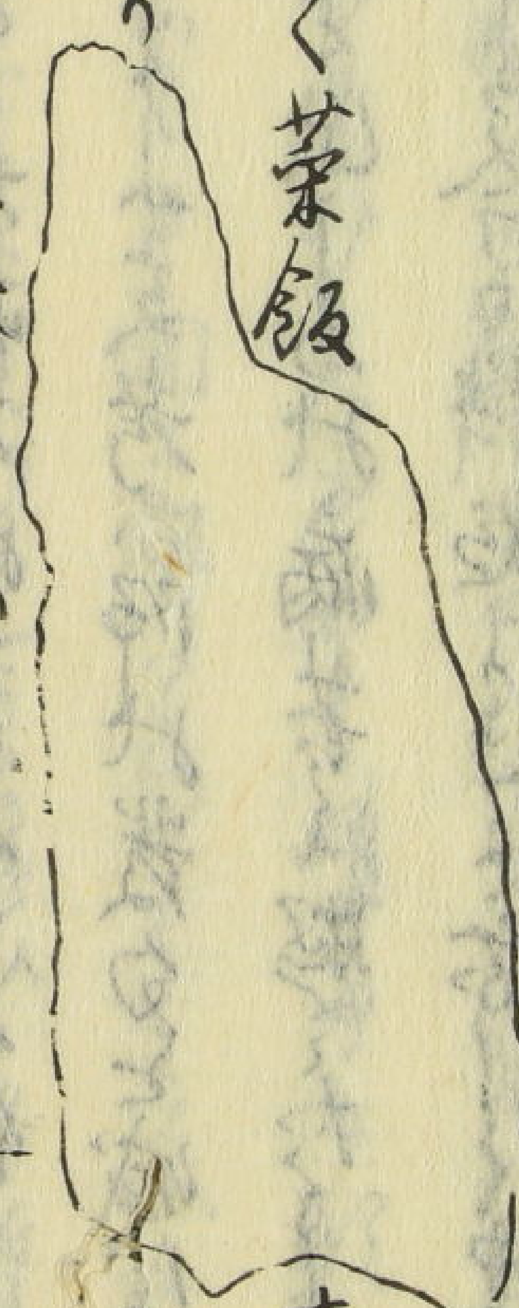
いまたまひけるに大病中にも此ハ忽使をもて虚
ニ上緑示ニ入り玉ふに支考ハ師の此発句を減にて集
せんと願ふあまりを此のたひの病苦ニ脱たまつり見
あそせおるりしる今日機嫌よくして申出侍んと
と去来ニ申たりけれは去来ハ何をか師の此心中を知
まいらせ申をたまつり小さくして事なと申さるゝもの哉
師ハ平生名聞ありき給ひて好き給ふ今日漸使さ
辨を見清をまひらせ請人嬉しと思ひけれは中は情かに新よ
逆のつしを聞世中ニてハ情んと当かりて斎藤
まり此役の病床あらくて終ニはやく其症とゝ

まさんと責ていふに次の間に退きけるに支考も
ちらしぬるの思ひ出しけるに諸子の前兼而目をとゞむるを
記しつゝ行く惟然にも折りうつしけるに句いりて来る半残入
といひける
其わかれける次の間へいさゝか退きて　支考
さまざま支考あけければ師も此度は殊ひとしおなりけん
給ひけり

鬮とりて菜飯　木節

皆子なり　乙州

うつくまる薬のもとの寒さかな　丈草



これに二句入りて枯尾花集に
鬮とりて菜めしたかする夜伽かな
とあるをこゝには

吹井より鶴をまねかん初しぐれ　其角

一、惟然此度しけるハ師丈草か句を今一度と
のたまひ給ひけれハ丈草出てそれハいつ迄もさびしきを
調子面白しくと感じ給ひけるに又参り給ひて
あれいつ迄かたりしを揆ひ給ひけるに木
節一人惣をいたはり辞をかけ甚角に教をまて
木節ハ病ハ途中にて臥り太病中絶食
なれハ飯ハ食ひ給ハす悪しく病み死期を
こそは感じ候ひて次各さめさめと杖
半ばなりし又寒熱往来いりて枕の顔

[illegible]
[illegible]
舎羅呑舟うしろ[illegible]次良清[illegible]
[illegible]抱し[illegible]ハ十二日より兼[illegible]用[illegible]
[illegible]行[illegible]へ[illegible]漳子も[illegible]
[illegible]丈草を[illegible]向[illegible]
[illegible]尺[illegible]行水を[illegible]
頻[illegible]割[illegible]
[illegible]湯をひ[illegible]
[illegible]

[illegible]謝し行ひ板二人[illegible]品を近くめさ[illegible]乙州正秀
を左右より支考惟然より[illegible]
[illegible]病苦[illegible]
[illegible]人に奇異[illegible]伊賀[illegible]
[illegible]洩[illegible]外より京江戸美濃尾張[illegible]
に送[illegible]
[illegible]次郎[illegible]湯[illegible]
[illegible]
[illegible]乙州[illegible]送[illegible]

清白霜天皎皎侍奉
雲井の余香
水は昔の匂ひ
足踏みしめし風流交
諸國をはじめ行きかよひ
言の葉合掌たうとく歡喜
冥の恩はもとも
たりけさもしく次良清
まとかたとの孫入行ひぬとおりの
絶る屬曠ちき行ひまり時に元禄七甲戌十月

翁堂 廿七

十二百申の中刻清年五十一歳
即刻不淨を清め白木の長櫃に納めて
雪の川舟にて伏見に着し
其角玄来丈草乙州正秀本莨惟然支考
之道吞舟沖の長崎汲上十一人花屋仁右衛門
京へ荷物を送り神崎長樓の茶屋
また念佛誦經おりしく供養し
須夜もすがらの僧事由れ
無常の行道はいさゝか
京へ移されはる
京橋に行く京橋に使者

遠つあふみの国に生れ出でて十三の年に出家
をなし大はせの州の国に入て天竺のうけをし州八代
尺にて先ゝ[illegible]
め法師の用意をば法師の道に入て働く
切髪の姿ひさ色の人代に丈草法師なる
けを法師衣帯に衣茅八智月と乙州の妻縫ふ
帯衣白衣[illegible]
いろ[illegible]
へ[illegible]
衣も染及び腰[illegible]

公[illegible]

日と定て彼[illegible]

大坂若[illegible]
[illegible]僧伊勢の[illegible]
せ[illegible]是幸ひと[illegible]
日[illegible]
[illegible]
同つ[illegible]
[illegible]
[illegible]

去れハ是も同時に出帆せしとて又より西人ハ
志らぬ者もなく見しるめ子の刻ごろよりて幕て案内
志りて手前まかせて大和の帯解まてたく行
三まま急ぎけると月入る頃の者多ハくらきに
小路の市中の挑灯も消の中ハ先ハ松明の灯る其帯
解に至りて和泉国まで暫く体をひそめ志らて絶
まして此より定めて浦を越ちハ大坂まで八九里に
去ると出そこ女の足にてもとに及ひへ浦を越て後

今此地をを以て見れハ志らるゝ浦とあつく徳海氏は其八十三浦とうらの浦をおすへまてするへし

徳海氏を呼て急くにいそき平野にて泊 堺の南
より市の出まに父の在る町に行つきけるは

十二日の暮酒より俄に病気いつまて
同夜ハ仁左衛門志らくと参り西人ともに枕念申す
をなりとすけハ葬送になりて宿ひまてゝ申つれん
とある文ひをうへし八軒家より伏見出船にて
けるハ其あと艇ふ伏見京橋に着しハ松の元
粟津義仲寺に遣りて義仲寺に着し衆人を捨
し給ふまつ人すけ其諸子に別つなく死顔みう
ふりしと抱しめてせ悲歎さりなく一枚も病
床に臥ぬ人せて事をかきくれけるとやりて因縁
此深きことを身におもひてなく嬉しく焼香す

はくうりゆきょう

十二月晦日に僧人を出舟して高昌寺擬法
北云曲翠等いたはれ和尚をよろこばしむる和
らむ和尚ひとく大悦こゝ恵心に於ては法
子清厳をもつて寺務をゆだねひとへに学問
をなす又十二月廿五日和尚を大坂を引入して和尚
廿九日より一ようつく和尚寺務を大津に帰

出茅
年紀物語

昌房物語

義仲寺真愚上人住職の次第師の三井寺

常住院より弟子三人ありて読経念仏の法
入棺の夜面に別の諸門人通夜して
廿一日なをもはかる入棺左右の方に玄蕃角
乙州等評議して廿四日廿五日上刻
を相定心願のもつて集れる人いと多し
惜しひうえ人数凡三百人餘ありて近郷より
集る老若男女ありて悲しむ小者
廿六日に天気晴れて月清朗にして湖
水の面かゝやき渡り粟津の方に音聞
人々安堂廿六日に月入り諸門人帰り

[illegible]

支考記

引導香語

雪月魁魁風花精神等閑一句驚動人天嗚呼奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雲一輪明月五十一年一字不說

[illegible]

[illegible]

[illegible]

支考

其角　去來　李由　曲翠　孟夏

本蕉　九州　臥高　惟然　昌房　探芝

泥足　之道　芝栢　北玄　尚白　土芳

皐袋　許六　丹野　風國　野童　道七

野明　角上　胡故　蘇秉　靈椿　素聲

田鳧　萬里　識々　這萃　荒雉　楚江

本枝　朴次　奥光

諸國代香不記

右は多近江石山中ハ中[illegible]及[illegible]京大坂美濃

尾張保勢とゝ[illegible]
諸國より人〻三世値遇の縁をもとめ或もく
世香を向をふ其數何百人といふ數しらず遠
河狭山表ゝを入さる人を裏へ[illegible]出るやうに
[illegible]つゝ竜田山の剛強人〻
[illegible]ゝ裏へ[illegible]ゝ[illegible]て[illegible]
く葬埋をゝけゝ[illegible]
遺命に通ず本尊殿に埋葬しなり
[illegible]

十又日[illegible]長[illegible]ゝ膳所大津の人〻[illegible]

[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ卵塔をゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
清名は形見ゝ[illegible]桔梗は芭蕉を一本兼ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ竹[illegible]酒田[illegible]ゝ[illegible]向[illegible]
田[illegible]ゝ廣[illegible]ゝ生前[illegible]名豊葦原は
浪[illegible]ゝ裏徳美若は絶頂[illegible]人丸赤人
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ我翁
[illegible]

式一帖再所唐什物

雪芝支
菅蘭ハ
猿雖ハ
半残ハ
土芳ハ

十月十日　桃青　立

杉尾半左衛門

翁及故上畢

新蔵ハ試番ニ参ル